



言葉凸凹 加法混色と減法混色

「加法混色」と「減法混色」という、輝度が「+」か「-」による混色の様相がある。

JIS の用語の定義では加法混色は「2種類以上の色刺激が網膜の同じ箇所に同時に若しくは急速に交互に入射して、または目で分解できない程度に入り混じった形で入射して生じる色刺激の混合」とされ、「減法混色」は「色フィルター又はその他の吸収媒質の重ね合わせによって別の色が生じること」としている。

「加法混色」はテレビ画面で見る色の状態であり、「減法混色」はフィルムの映写による映画の画面で見る色の状態である。

いずれも原色があり、テレビは赤・緑・青(RGB)であり、映画フィルムは赤・緑・青の補色に当たるシアン・マゼンタ・イエロー(CMY)である。最少の色数で無限大の色数の混色を行う技術が確立されている。

減法混色を基本とする4色によるカラー印刷は、CMYにブラックを加えた4色印刷が主流であるが、黒を加えるのは、文字や黒髪の印刷に便利であるという理由である。

インキ面が重なって見える減法混色の色と、目で分解できないほど細かな網点の混在による加法混色によって色が再現されているのがカラー印刷の色である。(永田泰弘)

●色名雑感 レカミエ (Récamier)

「レカミエ」は、ポンパドールやアントワネットと同様名前を冠したピンクの色名。

19世紀初頭のフランス・サロン社会で花形になったジュリエット・レカミエ夫人は、世界の歴史の中で最も美しい女性と言われていました。美形の上、強く美しい目をしており、当時としては珍しく髪は短く、ギリシャ風衣裳ヒマティオンを着用していました。性格は、聡明で信念が強く、忍耐力もあり、頑固で教養が高かったようです。

皇帝になったナポレオンは、レカミエ夫人を愛人にするため、彼女への贈り物として新古典主義の画家ダヴィッドに彼女の肖像画を依頼します。その作品「レカミエ夫人」は有名です。しかし、彼の想いは叶いませんでした。遂に、彼女はパリを追放されてしまいます。年齢40歳過ぎには、修道院に引き籠もってしまいますが、病気がちになっても、その魅力は失わなかったと言われています。

著名な小説家、政治家、作家や随筆家といった面々と親交を結んでいたようでした。(三本)

マダム・レカミエ
ジャック＝ルイ・
ダヴィッド画



●札幌の初夏の花

リラ冷えの街札幌の、初夏を告げる花の色を紹介します。

皆さんはリラのお花を知っていますか？
リラというのは仏名で、日本名はライラックです。

5月末の札幌はまだまだ涼しい(最高気温15～20℃)のですが、そこに一斉に咲く香りがよい紫のお花です。花の色は白や濃い紫などもあり、冷涼な地域を好むため本州ではあまり見かけたことはありません。

ちなみに、リラという花名を日本でやや有名にしたのは、ちょっと古くなりますが、作家の渡辺淳一氏の「リラ冷えの街」という作品からです。

大通公園、川下公園、北海道大学などに植えられていて、札幌の初夏の景観の一部になっています。

(昆野照美)

